

カトリック六甲教会

教会報

2007

9

No.429

9月の予定

		教会暦	教会行事
2	日	年間第22主日	14:00 結婚準備セミナー開始 (9/23まで)
3	月	聖グレゴリオ一世教皇教会博士	
7	金		初金 7:00 10:00 ミサ 婦人会例会
8	土	聖マリアの誕生	14:30 教会学校 始業式 14:00 シナピス移動学習会(たかとり教会)
9	日	年間第23主日	秋の墓参 (9時ミサ後) 17:00 集会祭儀(海星病院)
10	月	日本205福者殉教者	
13	木	聖ヨハネ・クリストモ司教教会博士	
14	金	十字架称賛	
15	土	悲しみの聖母	
16	日	年間第24主日	
17	月	敬老の日	13:00 三日月会ミサ・総会
20	木	聖アンデレ金と同志殉教者	14:00 ベタニアの集い
21	金	聖マタイ使徒福音記者	
23	日	年間第25主日 秋分の日 世界難民移住移動者の日	17:00 集会祭儀(海星病院)
27	木	聖ビンセンチオ・ア・パウロ司祭	
28	金	聖トマス西と15殉教者	
29	土	聖ミカエル 聖ガブリエル 聖ラファエル 大天使	
30	日	年間第26主日	17:00 集会祭儀(海星病院)

人生の満足感・達成感

～ベトナムの両親への感謝～

先月、ベトナムへ行ってきました。その時に両親の家に帰ったのですが、突然、母が自分の亡くなった後のことを相談してきました。79歳になる母は、今も本当によく働く人ですので、私はそんな話をする親に驚き、思わず問いかけてしまいました。「準備はできているの？」

過去には様々な問題があったものの、今は余裕のある暮らしができ、もうこの

世に思い残すことはない、準備はできている、と母は言いました。「いつでも召されたら、喜んで旅立てる。大きな葬儀はいらない。静かに神のみ元に行きたい。」逆に、子どもとして、両親が亡くなる時にどうすればいいのか、そして海外で暮らす8人の兄弟たちにこのことをどのように伝えるか、私が宿題をもらったように思いました。

両親には尊い命は与えてもらいましたが、子どもとして十分に育てられてはいないように思います。それでも信仰という大切なものを教えてもらいました。私たち家族は、混乱の時代にバラバラになりました。しかし、信仰で通じ合い、祈りでお互いのことを思いやるつながりが切れたことはありませんでした。そうして2人の子どもが神父になりました。親としてまっとうした人生、やり通したからこそその悔いのない人生、熟したからこそ身も軽くこの世を去っていく準備ができたという言葉、子どもとして寂しくはありましたが、私は嬉しい思いで聞いていました。

「まだ何か欠けているでしょうか。」と問う青年にイエスは「持っている物を売り払い、人々に施し、天に富を積み、私に従いなさい。」と言われました(マタイ19-20~22)。若者に対して「あるものを手放せ」と言われるイエスは、高齢者の「まだ何か欠けているでしょうか。」の問いに何と答えられるでしょうか。考えてみて下さい。きっと「充分である。」と言われるでしょう。色々なことがあったけ

れども充分である、今までのすべてを熟したものとして受け入れなさい、と言われるでしょう。信仰の力によって人生をまっとうできる、これが必要なことでしょう。気楽に、み手にすべてを委ねることができればなんと幸いなことでしょう。

そうして、できれば若者たちに、人生をまっとうする勇氣、生きる力を見せてほしいと思います。見えていない「欠けているもの」に不安を抱く若者たちに、人生としての満足、充分であるという感謝を伝えてほしいと思います。年齢に関係なく、現在置かれたところで満足できないこと、喜べないことは問題です。達成感・満足感はなかなか得られないものです。しかし人生がまっとうされるという感覚はいつでも感じられるはずです。それこそが人の人生の模範になっていくことだと思います。神様はきっと導いて下さいます。

多くの苦勞の実りを収穫している両親が、人生の模範になってくれたことに感謝したいと思います。

高山 親神父

各 部 会 だ よ り

☞ 婦人会

今年は特に暑い日が続いております。皆様お元氣にお過ごしでしょうか。くれぐれも、お体ご自愛くださいませ。

●8/18(土)の納涼祭、楽しんでいただけましたでしょうか。今年ご参加できなかった方々、来年は是非、一緒に楽しみましょう。お手伝い頂きました西1, 2, 3地区の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

●9/7(金)例会があります。今回はインドからお帰りになりました、援助修道会のSr. 松本の貴重な体験のお話をお伺いします。皆様お誘い合わせの上、ご参加下さい。多くの方のご参加をお待ちしております。

●10/28(日)にチャリティーバザーがあります。皆様に蚤の市の寄付をお願い致します。

9/16(日)~10/21(日)迄、イグナチオホールへ品物を入れるダンボールの箱を置きますので、ご協力お願いします。尚、品物は新品同様なもの、正味期限切れしていないもの、売れ筋な(皆さんがほしいと思われるもの)物をお願いいたします。宜しくお願い致します。

【予定】

9/7(金) 初金ミサ 10:00 例会 11:15

於：イグナチオホール

講演 『インドでの体験を終えて』

講師：Sr. 松本(援助修道会)

※講演終了後 昼食会があります。

9/14(金) 10:30 婦人会地区トップ会
於：第2会議室
※チャリティーバザーについての打ち合わせ
【聖堂当番表】

9/ 1(土) 午前 2班
9/ 7(金) 東1・2・3
9/15(土) 午前 3班
9/23(日) ミサ後4班
9/28(金) 東4・5・西1

☞三日月会

①三日月会喫茶
9/ 2(日) 9:00 ミサ後～13:00
②三日月会総会
9/17(月) 13:00～16:00
第一部 13:00～ 司教ミサ
14:00～ 司教講演「典礼と聖歌」
第二部 15:00～ 三日月会総会と懇談会

☞青年会

<定例会>
9/ 8(土)・9(日) キャンプ 六甲山 YMCA
9/23(日) 12:30～ 定例会 第5会議室
内容：聖書を読んで分かち合い
※初めての方もお気軽にご参加ください。

☞教会学校

9/8(土) 14:30～ 始業式
9/15(土) 通常クラス
9/22(土) ホールミサ
9/29(土) お休み(第5週目のため)

☞典礼部

<聖体奉仕者の集いについて>
日時：2007年11月4日(日) 13:30～
場所：イグナチオホール
指導：オマリー神父様
なお、事前アンケートを実施いたします。

☞社会活動部

9/14(金) 10:00～ 社会活動部連絡会
(第2会議室)
♪各ボランティアグループの責任者の方はご参加をお願いします。

☞広報部

今月号より、桜井主任司祭のコラムコーナー「主任司祭の地平線」が始まりました！
毎月掲載の予定です。お楽しみに。

主任司祭の地平線

広報部の発案により、今月号から新しいコラムを入れることになりました。主任司祭から皆様へのお知らせやお願い、苦言甘言(?)など短い言葉を載せるためです。よろしくお願ひ致します。

さて9月に入り、夏休みを終えキャンプなどで真っ黒になった子供たちや中高生たちが戻ってきます。日曜日のミサや教会学校の始業式(9月8日土曜日)には、元気な姿をみせてほしいですね。

この春～夏の間新しく受洗された方々や転入して来られた方々も少しずつ教会に馴染んでこれたと思います。ご一緒に祈り、互いに声を掛け合いながら横のつながりも大切にしましょう。

9月9日(日)には9:00ミサ後に秋の墓参があり、今年は例年以上に多くの方々の共同墓地への埋葬もあります。共に祈り共に歩んだ共同体の家族として、今も忘れられない方々です。心からの感謝をもって、故人のご冥福を祈りましょう。

今回特記すべきことは、8月号でお知らせした通り、マシア神父(スペイン出身のイエズス会員)が既にザビエル・ハウスに居住し、教会でもミサなどに協力して下さることです。当面は多くの仕事を残しておられますが、来春からは教会のためにもっと時間が取れるとのこと。年齢的には私の一年先輩という若さ(?)であり、「神戸の町は始めてでよう分からへんけど、ほかの町よりもましや・・・」と関西弁のユーモアを勉強中のようです。心から歓迎したいと思います。(桜井神父)

<お 知 ら せ>

【社会活動部より】

9/5(水) 10:00～ 手芸の集い(第1・2会議室)

♪参加自由。お気軽にご参加下さい。

♪原則として第1水曜日

9/8(土) 10:00～ 炊き出し(イグナチオお台所)

♪イグナチオお台所調理。

♪小野浜グラウンドにて配食

9/16(日) 9:00 ミサ後 手作りコーナー(イグナチオホール)

♪お弁当・食品・小物販売

9/20(木) 14:00～ ベタニアの集い(イグナチオホール)

♪聖体拝領式と茶話会

9/28(金) 14:00～ おにぎり作り(イグナチオお台所)

♪須磨方面夜回り支援

シナピス移動学習会

日 時：9月8日(土) 午後2時～5時

場 所：カトリックたかとり教会

参加費：無料

テーマ：“信仰を守りたい だから憲法を守ろう”

講 師：吉村信夫氏(六甲学院教諭)

【三日月会・青年会・壮年会・婦人会 共同企画】

9/17(月) 三日月会 総会

講 話：『聖歌に依って主に祈りを捧げ 皆で唱和して主を称えよう』
聖歌を歌う意義を池長大司教がお話下さいます。

開 始：13:00～(司教ミサ)

場 所：六甲教会聖堂

【養成部より】

9月になりました。待っていた哲学連続講座がいよいよ始まります。

講 師：奥村和滋先生(聖トマス大学人間学科教授)

第1回講座：9月22日(土) 午前10時30分より

場 所：六甲学院研修所(教会から北へ歩いて約3分)

日頃の人間関係においても、出来るだけ波風を立てず、仲良さそうに仮面をつけてふるまっていますか？ 社会の不条理に対しても、自分に直接利害がおよばなければ目をそむけていませんか？ ただ、のんびんだらりと生きるのではなく、良く生きましょう。判断をするための学問。それが哲学だと思いません。恋愛に対しても、政治に対しても。

第2回以降は来年3月まで毎月第4土曜日、同じ場所、同じ時間に勉強します。

(但し12月はお休みです。)

神戸地区養成委員会主催 ダニエル・コリンズ神父様講演会（7月16日）

ミサ・典礼、「聖体と信徒の生活」に参加して

私はこの講演を楽しみにしていた。それはいつも土曜日に教会に来られて、日曜日には戻っていかれるコリンズ神父様と出会える機会は少なく、もっと話を聞きたいと思っていたからである。また神戸地区の主催ということで、地区の方針を知る機会でもあるからだ。

期待通り神父様の講話は力強く、私たちの心にせまり、私たちは心を研ぎ澄まして神父様の話に聞き入った。それは、続いて行なわれた豊かな分かち合いが証明している。神父様の講演を簡単に紹介することはできないが、私は以下の内容を記したい。

「洗礼、堅信は1回だけだが、毎日のミサを通して毎日聖体拝領するのはなぜか？ 私たちは出来事を通して復活のキリストに出会う可能性があり、その方法の1つは聖体拝領である。ご聖体は私たちにとって生活の味である。味は人によって異なるが、日常生活の中で私たちの態度、行いに表れ、それを見た人が「信者」と言ってくれたら大成功である。実生活の中で一番大切なのはミサに参加して聖体拝領することであり、毎日の生活とミサ、聖体を切り離すことはできない。日常生活と聖体はどういう関係があるのか？ 答えはあるが人によって様々である。ただ共通点は私たちは祭壇を囲んで1つの民としてキリストの体になっていることである。ごミサに参加することによってキリストとの目に見える関係が表れてくる。聖体拝領することでよい人間になる、強められる、癒される可能性がある。その可能性をつかむのは私たち自身である。信仰は無償の恵み、自力ではできない。しかし与えられている信仰を養う義務がある、自分の努力がいる。同時にご聖体に対する態度、価値を養う義務がある。養われた恵みは自分のためではない、他人のためのものである。それはパンの増加で、キリストがパンを増やし、そのパンを配ったのは人であることが示している。それは使徒的な活動である。」

以前、地雷が埋まっている地帯を越えて、命をかけて、ご聖体をもらいに行くという話を聞いたことがある。私たちはいつもあまりにも簡単にごミサにあずかり、ご聖体を受けることができる。そのためこの恵みを忘れがちである。今日ごミサ、ご聖体の意味を改めて認識することができた。この大切にご聖体を受けるごミサにあずかる前に、心を落ち着けるために少しの時間を持ちたい。また、私たちは1つの民であることを示し、みんなで祭壇を囲みたいと思う。そのように共同体のごミサの中で祈りあい、ご聖体を受けて日常生活へと派遣されて行くなら、私たちはもっと強く信仰を示せるのではないだろうか。（大倉）

スリランカの茶摘み労働者との出逢いを通して（8月7日）

真夏の昼下がりに、「バンバン神父を囲む勉強会」は予想を上回る大勢の人が参加し、神父様よりスリランカの茶摘み労働者と共に生活された貴重な体験と悩みと祈りの中で思索されたことをお伺いしました。（その内容は教会報2007年2月に記載されています。）

南アジアのインド半島南西に浮かぶ島国スリランカ、私にはセイロン紅茶でなじみが深く、緑滴る豊かな自然に恵まれた島のイメージがあります。しかし多様な民族・言語や宗教、不安定な政情の新しい国であること、その中で植民地の時代から続く経営者からの支配と管理の下で、移民の立場で国の保障もなく、低い賃金と狭隘な住宅に縛られ、社会から孤立させられている茶摘み労働者と家族の生活をお聞きし、初めて知る彼らの過酷な状況に心が痛み、いつまでも重く響いています。ふつう私たちは社会

や時代の進展を人権や福祉、文化や教育の在りようから計り、暴力や抑圧、差別や偏見をなくすことを目指していますが、私たちの既成の物差しで推し量ることができない不条理な社会が現存していることに愕然としました。神父様もこのギャップを理解しがたく、虐げられた人々に対しての教会のあり方に悩まれたようにお見受けしました。神父様も言われましたが、確かなことは、彼らが何世代に渡って組織的に抑圧され、社会的地位も与えられず、先が見えない状況の中で、人がつくり出した政治・政府が信頼できず、教会に拠りどころを求め、祈りと献金を捧げ、信仰そのものが彼らを強め、生活の支えとなっていることです。神は全てをご存知であり、彼らと共にあると確信できます。バンバン神父様は自らの修練の実りを私たちに分け与えて下さいました。有難うございました。（平田）

2007年平和旬間 祈りの道場（8月10日）

8月10日は、ことのほかの暑さでしたが、聖堂内は静謐かつ真摯な空気で満たされ、神に直面する努力を通じて心が清められた感動的な一日でした。

バンバン・ルディアント神父様は、[マルコ福音からみる神の正義]の視点から黙想を指導されました。マルコにとってローマ帝国は[レギオン]（人間と社会を縛り付けている力）の象徴であったが、イエスにはそれを覆す力が存在した。いつの世にあっても大半の人は、悪いものと認識しながらも[レギオン]に支配されている。各人はイエスと出会った[ガリラヤ]に立ち帰り、勇気を持って前進し、神の平和を求めようという力強いメッセージでした。（養成部 志垣）

「広島巡礼に参加して」

“戦争を知らない子供たち”と歌われていた私たち世代も来年還暦を迎える年となりました。

戦後62年、今年は久間防衛相の原爆「しょうがない」発言や、地震による柏崎刈羽原子力発電所の破損事故等、8月を迎えるまでにいろいろな問題が世間をにぎわしておりました。「広島・平和への道」のお誘いのチラシを見ながら、あのテレビで放映される記念式典のカットと照りつける広島の暑さと自分の体調を考え、“どうしようか”と迷っておりましたが、1本の電話に押され、締切りを過ぎておりましたが、友達を誘って参加させて頂くことにしました。

広島では原爆資料館や原爆ドーム、様々の碑をめぐり、神父様の被爆者証言を聞き、改めて原爆の惨状を目の当たりにすると、原爆の恐ろしさを忘れてはならない、また、次の世代へ伝えてゆかなければならない義務と、戦争は絶対にしてはならないという思いを改めて抱きました。幸い、本当に多くの人たちが（外国人を含めて）この広島を訪れておりましたし、お昼を頂いた公園では若いお母さんが小さな子供たちを二人連れて来ておられました。平和行進は埼玉・東京・名古屋・大阪・広島・福岡・長崎の司教区と聖公会の人たちが共に祈りをささげ、一緒に歌を歌い、警察官に守られながら平和公園から平和記念聖堂までの4km近くの道を行進致しました。教会の人たちが用意して下さいましたお茶のおいしかったこと、2杯、3杯とおかわりをして頂きました。



最後に皆様と共に原爆で苦しんで亡くなった方を思い、今もまだ後遺症で苦しんでいる方々を思い、世界中から戦争が無くなりますようにと平和を願ってミサを捧げました。

巡礼に参加できましたことを感謝し、日本人としてやり残してきたことをひとつやり終えたような思いがしています。
(福島)

合同礼拝（8月12日）

8月12日午後1時半から大聖堂で7回目の合同礼拝がもたれ、近隣教会だけでなく、垂水、芦屋のプロテスタント教会からも参加して下さいました。聖書教会杉浩二兄の開会祈禱によって礼拝は導かれ、聖書はマタイ11章11—19を神港教会高島潤長老により朗読されました。六甲教会からは混声合唱団によって、フランシスコの「平和の祈り」、コリントI：13章「愛の讃歌」が捧げられました。今年には聖公会神戸聖ペテロ教会の信岡章人司祭から「門を叩け！」と題してメッセージを戴きました。オマリー神父様の祝福の祈りをもって礼拝を終わりました。

信岡先生のメッセージの要旨を記させていただきます。

戦後62年、平和を求める人間がどうしてこんな悲しい戦争や殺戮を繰り返すのか、想像も答えも見つからない。自由と平和、安寧と進歩、成長と言う美名のもとにどれだけ戦争が行われているか。世界中の何処かで今日、今この瞬間にも誰かの血が流されている。

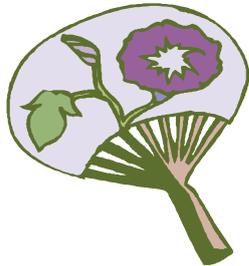
戦後の混乱の中でキリスト教の一致と平和に大きな足跡を残した八代斌助主教は遺言として次の言葉をのこした。

「世界中の指導者や主教達に伝えよ。スローガン、宣言などはやめなさい。最も大切なのは人を愛し、愛される事！どんなに小さくても良い。一つの魂をキリストに結び合わせよ」主教の死後幾つの憲章、宣言が掲げられ、アピールされて来たことか。しかし現実には「笛をふいても踊らず、葬式の歌をうたっても悲しまない」。平和、平和と云っても実現出来ないのが現実なら諦めるべきなのか？誰かがチャレンジしてくれるまで待てば良いことなのか。戦後の流行歌に「異国の丘」があった。「我慢だ待っている……」我慢に代表される忍耐はクリスチャンの特性である。信仰者は、希望をむしり取られるような現実の中にあっても決して希望をすてない。信仰は希望である。希望だからと云っても漫然と手をこまぬいていけばよいのではない。常にチャレンジする姿勢が要求される。（門を叩きなさい。そうすれば開かれる）では門の叩き方とは。「砂漠の教父」アーセニウスに神は「この世を離れ、静まり、常に祈れ」と教えられた。世を離れるとは世捨て人なることではない。聖アウグスチヌスは善いキリスト者は善良な市民でなければならない！と教えている。正統な信仰者は社会の中にあっても社会に捕われない人である事である。そのために何時、何処でも自分の祠をもっていなければならない。その中でキリストと差し向い、個人的な指導を仰ぐ。カトリックには「聖体訪問」と言う美しい習慣があり、プロテスタントには「密室の祈り」がある。それは同時に、仏教で言う“只管打坐”（唯、黙って座る）世界である。静寂こそ祈りの成長をしめす。私達が希望を持ってキリストの前に立つ時、私達の姿そのものが生きた祈りとなっている。神は全知全能であるから祈らなくてもすべて御存知と早合点してはならない。神を必要としない人の願いを聞くほど神様は暇人ではない。つねに祈る必要性は自明の理である。この世を離れてキリストの前に座り、静かに祈る姿勢を保ち続けるかぎり、自分の中におとずれる神の平和が外に向かって迸り出る。平和のさざ波の広がりである。正に「希望はここに」ある。

(内山)



納涼の夕べ



2007年8月18日

「納涼の夕べ」を終えて

今年の納涼の夕べは、まさに炎暑の日に遭遇しました。

夕方、ちょっと薄暗くなって来て、あそこにいる「彼は誰ぞ」と問いかける「誰そ彼時（黄昏時）」といった風情には、ちょっと形容出来難い「夕べ」でありました。

しかし、いつもながら大勢の老若男女が集い、テント張り、舞台、屋台作り、料理準備と精力的に働き楽しんだ真夏の宵でした。

「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」 本年は、昨年にも増して近隣の人々を含め多くの方々の御来場を期待し、新しい試みを講じましたところ、近隣の方々、子供達も多く集っていただいたとの印象をもちました。しかし、この暑さの為にいつも御参加される方々のなかには、おみえにならなかった方も多数あったようにも思います。

いつもの婦人会、壮年会の供する食事、中高生会、教会学校の綿菓子、タコ焼き、その他ゲーム、青年会采配の3バンドの競演など楽しい催しでした。地区会の信徒の属する地区を表示した大きな地図にも関心を示す人も多く見受けられ、地区会の活動への関心を高めたのではないのでしょうか。そして、宴が終了した後の「あとかたづけ」も多くの方々の協力で瞬く間に終わりました。

「こころよき疲れなるかな、息もつかず仕事をしたる後のこの疲れ」(石川啄木より)

皆様 ひとりひとりのいろんな形での協力を感謝いたします。

「うどん屋の釜」 言う(湯) ばかりで実がない小さな実行委員長も少し暑さで頭がやられたようです。纏まりのない報告文で御勘弁を！

行事部長 船井



どんなに暑くても、子どもたちは
元気一杯。笑顔、笑顔、笑顔。
お友だちと一緒に“ピース！”





みんなの広場

「知床に行つて」

8月の最初に、家族で知床に行った。1泊2日の短い旅であったが、旅の印象はそこで出会った人々と自然によるとつくづく感じた良い旅であった。

皆様もご存知の通り、知床は世界自然遺産で、私は船でしか見られない知床の景色を楽しむ事と、知床五湖に行きたいと願っていた。天候の関係で1日目に観光船に乗り、2日目に知床五湖を一湖のみ散策した。観光船からの景色は予想以上で、長年の波や流水で削り取られ、大きな穴が開いた断崖絶壁の様子は私に“時”を感じさせた。

夕方宿泊先のホテルに着いたが、ここで私はホテルの従業員の方々の行動に感動した。フロントで夫が手続きを済ませ、何気なく観光先について訪ねると、一人の方がバスの時刻を調べ、部屋に荷物を運びかけていた方が運転手に変身して、私達を最寄のバス停まで送り届けて下さった。皆さん一丸となり、サービスという域を超え、私達の為にできることは精一杯したいという誠意に溢れていた。従業員の方々の態度は私達がホテルを発つまで一貫していた。私はふと子供の頃に聞かされていた、“私の傍にいる人は神様と”という言葉を思い出した。

2日目に行った知床五湖は何とも神秘的であった。いつか是非、五湖全部を歩いてみたい。ところでここはヒグマの出没状況で散策できないことも多い。パンフレットの次の言葉にハッとさせられた。“知床五湖はヒグマの良好な生息地であって、我々はそのにお邪魔させてもらっているということを忘れないで下さい。”そう、私達はお邪魔しているのである。私達人間は自然に対してさえ、自分達が操っている錯覚に陥っている時があるのではないか。“自然を守る”という言葉さえ、一歩間違えると人間の傲慢のように思える。知床の人達は自然に対して、畏敬の念を持っている。だからこそ、世界自然遺産に登録されたのだろう。神様のくださった自然を私達は忘れてはならない。今度はもう少しのんびりと、知床の自然と語り合いたいと思う。 (古寺)

「パリの教会」

サンジェルマン地区のサン・シュルピス教会のミサ。教会は奥行き120m、幅57mのパリ屈指の教会とありますが、9時のミサでは奥の小聖堂で行われ、5、60人程度の参列者でした。

先唱は80歳超のご婦人。オレンジ色の上着に下のシャツの白い襟が鮮明にでていました。そして、アイボリーのパンツ。グレーの髪にピッタリでした。何気なさをアピールしたパリファッションでしょう。更に、賛美歌や祈りを促す身振りが滑らかで、その声は優しくしかりとして、引き込まれそうでした。フランス語は恋を語るにベストの言葉と聞きましたが、祈りの時もベストです。“クリスト”しか聞き取れない自分には、音楽を聴いているようで違和感はありませんでした。奉納の時、彼女が傍に来て、予想よりはるかに年長であると知り驚きました。先唱者の御手本を見た様な気がし、自分の先唱の質の悪さを反省しました。

小型のパイプオルガンの音も高からず低からず。奏者は祭壇を背にしてるにもかかわらず、先唱者の動きにぴったり合っていました。これは不思議。バックミラーもありませんでした。

説教、当然意味はわかりませんが、感じでは今日の聖書の解説書を淡々と読んでるようでした。参列者にうなづきも笑いも無く、神父の情は感じられないままに終わりました。聖体拝領でいただいたパンは、厚みが六甲の3, 4倍で、ウエハースでは無くパンであると実感できました。

教会の鐘楼は工事中で鐘の音はありませんでしたが、丁度折り良くすぐ傍のサン・ジェルマン・デ・プレ教会のミサ終了の鐘を聞くことが出来ました。こんなに近くに何軒も教会があれば、当然ミサの参列者も少なくなるでしょう。

ミサ全体では、今日のフランス語のミサが、海外で受けたミサのうち最も良い気持ちを感じました。

(S. F)

追記：この教会の壁面にはドラクロワの描いた「ジャコブと天使の戦い」があり、観光客の訪問も多いです。



斜め後ろから見たサン・シュルピス教会



「ジャコブと天使の戦い」ドラクロワ

ペシャワール会の中村哲医師の講演会

10月15日(月) 18時開場

講演:18:30~20:00

場所:六甲教会お聖堂

中村哲医師は1984年日本キリスト教海外医療協力会からパキスタン ペシャワールに派遣され当地でハンセン病治療に取り組まれました。現地活動は23年に及び、現在はアフガニスタンで総合的農村復興事業「緑の大地計画」に取り組んでおられます。

お忙しい中での一時帰国講演で、六甲学院での講演が同日計画されており、先般の婦人会・壮年会合同例会で講演して頂いた吉村信夫先生のご配慮で教会での講演が実現しました。

大変興味深く貴重なお話しを聞く事が出来ると思います。滅多にないチャンスです。家族・友人・知人を誘って大勢集まりましょう。

(川合)

※今月号の図書紹介で、同医師の著書が紹介されています。ご覧ください。(広報部)

図書紹介

「ダラエ・ヌールへの道」

中村哲 著
石風社

この本に出会う前に、NHKの「知るを楽しむ」という番組を観ました。その中で著者は、アフガニスタンで医者という仕事を越えて、地元の人たちと一緒に井戸を掘り、知恵を出し合って、灌漑のための水路を築き、砂漠化した土地を青々とした麦畑に変えていったことが紹介されていました。とても印象的でした。

そんな時、この本に出会いました。ここでの話は、その灌漑事業を始める10年も前のことです。

1979年にソ連がアフガニスタンに侵攻して、多くの難民が生まれました。メディアが断片的な偏った情報を流し、国連の団体やNGOが目立つ活動をしている中で、中村氏は、ハンセン病の診療から始め、さらに山村の無医地区に診療所を開設していきます。宗教も政治も関係なく、目の前の患者を助けながら、その間も地元の医療スタッフを育てていくなど、いつも現地を中心にした活動、本当の意味での援助を続けていきます。地元の人たちの信頼を得ることを優先的に考え、地に足をつけた活動を彼らと共に歩いていく姿が書かれています。

中村氏は、長い活動の間、銃で守られているという経験はなく、ただ相手を信頼することが唯一の自分の身を守る術だと言っています。暴力で向かうと暴力しか返ってこない、武器を持たない勇気が必要だという言葉がとても力強く感じられます。

不安や暴力が支配する中で、私たちが本当に必要としているもの、また、貧しい中の豊かさ、弱い中にある強さを教えてくれた1冊でした。
(中村)

教会報10月号の発行は、9月30日(日)です。
編集会議は9月23日(日)です。
記事原稿は、9月16日(日)正午までに信徒会館事務室
へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会
〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21
電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6
発行責任者 桜 井 彦 孝 神 父
編 集 広 報 部